HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	語の意味に関する一考察：Fortbewegungsverbenの意味記述
Author(s)	山田, 恵子
Citation	独語独文学科研究年報, 17, 27-43
Issue Date	1991-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25824
Type	bulletin (article)
File Information	17_P27-43.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

語の意味に関する一考察
—— Fortbewegungsverben の意味記述 ——

0. 序
1. 語の意味とは何か
2. 意味記述の方法論
3. Fortbewegungsverben の意味記述 — 基本的意味と隠喩的用法

山 田 恵 子

0. 序

意味に関する言語学的研究は、十九世紀前期の Semasiologie（形態から意味を問う語義論）、後期の Onomasiologie（意味から形態を問う名称論、主に方言研究）に遡ることができる。また現在意味論一般に使われている sémantique という術語は、十九世紀末にブレアルによって言語学に導入された。しかしこの時代は専ら形態、特に音韻に関心が向けられ、歴史的比較言語学的に研究が行われた為、数少ない意味研究に於いても関心の的は、個々の単語の個別的な意味の変遷であった。

このような歴史主義的観点は、二十世紀の初め、ソシュール（1916）の理論によって完全に一変した。通時態と共時態を峻別し、共時態を優先させることによって、言語の体系的記述に重点を置いた彼の方法論は、その後の構造主義に多大な影響を及ぼすことになるのであるが、意味自体の問題はあまり論じられていない。ブルームフィールドをはじめとするアメリカ構造主義でも意味研究は軽視され、ようやくカッツ、フォードア（1963）によって生成変形文法の枠内で考察されることになった。これに対し、ヨーロッパの言語学では、トゥリーアを皮切に語場研究が盛んとなり、コセリウによっては語彙の構造的意味論が展開された。最近の趨勢としては、語の意味論が下火になり、文の意味論、特に真理条件に基づいた研究に関心が移っているが、語の意味研究が完了したという訳ではない。本稿では、語の意味とは何かという原点に立ち戻りながら、妥当な語の意味記述を探り、具体的に、Fortbewegungsverben の基本的意味の記述を行う。その際、その隠喩的用法にも着目したい。

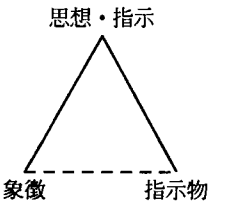
1. 語の意味とは何か

言語についての甚深な哲学的考察は、既にプラトン、アリストテレスによって行われている。プラ

トンの『クラテュロス』では、名前がある事物の名前である正当性は人間の勝手な取り決めであると考えるヘルモゲネスと、名前は事物の本性を表すとするクラテュロスが、それぞれソクラテスと対話する。ソクラテスは名前が事物の本性を表すためには、それを構成している字母が、事物の本性に似ていなければならないとして、二十四字母のうち十四字母の原意を推定したが、それに合わない名前もあることから結局は結論が出されないままとなる。またコセリウ（1975）によれば、アリストテレスは音と物の関係を問うのは無意味だとし、名前はなぜあるのかと考えるのではなく、何のためにあるのか、その機能は何なのかを問う。名前は意味をもった音であり、物の中にあるのではなく人間の領域の中にある。つまり言葉は自然に則したものではなく、動機づけられていない任意の記号だとする。しかし言葉は単語と物との慣習的関係でもなく、意識の内容を表している。

このようにアリストテレスによって既に言語記号の二面性が認識され、言語記号を物と同一視することが否定されている。こうした考え方はソシュール（1916）に於いて顕著となる。彼の場合、言語記号は物と名前を結んでいるのではなく、概念（所記：signifié）と聴覚映像（能記：signifiant）を恣意的に結ぶ心的実在体である。

これに対し、オグデン、リチャーズは『意味の意味』（1923）に於いて、三つの要素即ち言語記号なる象徴、概念なる思想・指示、および指示物との関係を次のような三角形で図示した。象徴は指示物とは直接繋がっておらず、思想を通して間接的に結びつけられる。この図は、言語記号を指示物と同一視するという一見陥りやすい誤謬からの解放でもあるが、依然として「意味」は主観的で不明瞭なままである。



それでは果して語の意味の実体はいかなるものであろうか。この問いに対する明晰な解答をフレーゲ（1892）に見ることが出来る。フレーゲも、言語記号には特定の意味（彼はこれを „Sinn“ と呼んでいる）が対応し、この意味に再び特定の指示物（彼によれば „Bedeutung“）が対応していると考える。しかし彼は二つの異なる記号、例えば „Abendstern“ と „Morgenstern“ が指示する物は同じであるにもかかわらず、その意味は異なっているという事実を指摘し、意味を指示物と同一視することを誤りだとする。「記号の相違は、表示された物の所与の仕方（„die Art des Gegebenseins“）の相違に対応し」、「この所与の仕方が意味の中に含まれている」（S. 41）。更にこの意味は主観的な概念ではなく、多くの人の共有財産と見做されている。

フレーゲの見解は乳幼児の言語習得過程にも当てはめて考えることができる。二才位の幼児に対して親が具体的にある木を指さして「き」と言うと、幼児はその音声と指された実際の木を結びつける。しかしその際幼児は、木その物ではなく、それによって呼び起こされたある形象的イメージを持つと考えられる。このイメージとは、個々人が全く同じ物を見てもそれぞれ違っており、その物が持っている何らかの要素が特に目につき、それが心を占める。これ位の年令の幼児は、このような自分独自

のイメージで言葉を使うようになるだろう。例えば、我が娘が二才になる頃、外に落ちていた枯れ枝を拾って「えだ」という言葉を覚えた後、家の茶色い柱を見て「えだ」と言い、また蛙の絵を見て「かえる」という言葉を覚えた後、ドアや窓枠に取り付けられた二つのねじを見て「かえる」と言っていた（そう言われてみるとそれは蛙の目を想像させるのである）。これは言葉の誤用というものではなく、いわば幼児の個人的な概念化の試みであり（ヴィゴツキー（1934）参照）、フレーゲとは逆の意味ではあるが、幼児の個人的な「指示物の所与の仕方」がここでは問題になっているといえよう。

しかしながら、このような幼児の個人的イメージからなされた言葉の使い方は、親によって肯定されたり否定されたりする。幼児は数多くの言葉の用法を耳にし、どういう言葉がどういう場面で使われたかを実によく記憶している。「あるもの」にはある語が使えて、それに類似していると自分が感ずる他のものにはその語が使えない。その違いは何か。「あるもの」に備わっているどのようなメルクマールが重要なのか。「あるもの」が他の物とは違うどのような示差的要素を持っている時その語が使えるのか。或いは「あるもの」がどのような状況下にある時その語が使えるのか。こうした言語体験を積み重ねながら、幼児はそれぞれの語が一般的にどういうものを表すために使われるのかを習得していくのである。語の意味とは、社会的、慣習的な概念である。即ち、物それ自体を表しているのではなく、それをどのようなパースペクティヴで捉えているのかという点にかかっており、フレーゲのいう「指示物の所与の仕方」に他ならないのである。

2. 意味記述の方法論

さて、このような社会的、慣習的概念である意味は、幼児期の言語習得過程に於いて言葉の多数の用法から知り得ることではあるのだが、ヴィトゲンシュタイン（1953）の「語の意味とは言語の中におけるその用法である」（256頁）という説で満足する訳にはいかない。また用法の羅列や単なる分類だけに終ってもならないのであり、様々な用法の中でその語自体の根本的意味と文全体から生じてくる意味とを区別しなければならない。他方、個別的にある特定の語の用法にだけ注目するのでは、どの意味要素がその語に特有なのかが把握されにくい。それ故、全体的視野に立ち、語彙全体を構成している各々の「語場 (Wortfeld)」の中で個々の語を比較することによって、その語に特有な意味要素、即ち、他の語との示差的要素を明確にする必要がある。

ところで、この「語場」という概念はイプセンによって言語学に導入され、その後トゥリーアによって発展させられた。彼の語場に関する論文の多くは1930年代に書かれたが、その後三十年程経って出された『語場の新旧』（1968）の中で彼は自分の語場研究を振り返りその動機を記している。トゥリーアによれば、彼の語場理論はソシュールや音韻学の考え方に直接誘発されたのではなく、従来の歴史的な命名論の窮地から生じてきた。ある物がどのような語で表されるのか、更にある概念がどのよう

な語で表されているのかということを歴史的変遷の中で研究しようとする時、ある概念自体が歴史の中で不動ではないので従来の命名論は挫折せざるを得ず、「概念の複合体」という観点に立つことになった。こうしてトゥリーアは、それぞれの時代ごとに概念場とそれを構成する語彙を考察した後に初めてその歴史的変遷を知り得ると考える。この点で彼は、十九世紀を風靡していた語の個別的な史的研究を克服し、ソシュールの通時論と共時論の峻別を乗り越えている。

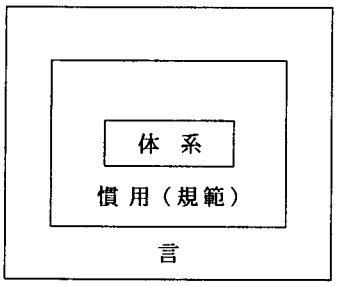
トゥリーア（1931）のいう「語場(„Wortfeld“)」は、個別言語の語彙全体の中で内容的に関連している部分的断片であり、閉じられた概念複合体に割り当てられている。この概念領域の分節の仕方は、言語共同体によって違っており、それが語場の構成に現れているとする。語場内の語彙は相互に依存しており、「語場内の数と位置によってその意味を規定している」（S. 7）という考え方は、ソシュールのいう「価値」（1916：160－164頁、一つの言語記号は他の語と関連しており言語体系の中で位置価値をもっている）と相通ずるものである。トゥリーアの初期の理論では、しばしば極端に理想化された見解が見受けられるが、語場内の個々の単語はモザイクのように内容的にはっきりと境界づけられているという主張はその後修正されている（1968）。彼は、同一語場に属すかどうかの基準を内容的類似のみに置き、仮に類別や語形の違いで語場を分けたとしたら全体の分節を正確に把握できないと考えている（1934a）が、しかしそうすると語場は必要以上に膨れて体系づけられないままになってしまうだろう。

トゥリーアの語場が分割的であったのに対し、ポルツィヒ（1934）は統合的レベルで「本質的な意味関係(„wesenhafte bedeutungsbeziehungen“)」を考察した。動詞と形容詞の個々の語の中には他の語が既に含意されており、それは「一つの語には他の語が容易に思いつかれるような連合ではなく、そこでいわれている意味自体の本質に基づく一つの関係」（S. 78）である。例えば「„gehen“ の本質には、人間の足を使ってということが入っている。」（S. 78）。その他、„greifen“ ならば「手」、„sehen“ は「目」、„hören“ は「耳」、„lecken“ は「舌」、„küssen“ は「唇」、„bellen“ は「犬」、„wiehern“ は「馬」、„blond“ は「人間の髪の毛の色」が前提とされている。このような本質的な意味関係があるからこそメタファーが理解されるという。

こうして語場理論は、トゥリーアの意味関連にのみ基づいた語場、更にポルツィヒの統合的レベルの「基本的意味場(„elementare bedeutungsfelder“)」（S. 80）を経て、コセリウに於いて系合的及び統合的な両面で構造化されることになる。コセリウ（1966）は、言語全体の中で語彙構造の領域を次のように限定づける。

- 事柄（科学及び技術上の専門用語）
- 言語
  - メタ言語
  - 第一次言語（歴史言語）
    - 通時態
    - 共時態
      - 反復言述（伝統的に凝結してしまった言い回し）
      - 言述技術
        - 通域的差異（地理的な相違）— 共域的技術 — 唯一の均質的地理空間
        - 通層的差異（文化的社会的階層の相違）— 共層的技術 — 唯一の階層レベル
        - 通様的差異（表現様式の相違）— 共様的技術 — 唯一の文体

結局、語彙素記述の対象となるのは、ある一つの共域的、共層的、共様的技術で、これは機能言語と呼ばれるものである。更にこの機能言語は下図のように捉えられている（1969：74頁、1952）。



ソシュール（1916）が、多様で混質的なランガージュを、本質的で言語活動の社会的部分であるラングと、個人的部分であるパロールに分けたのに対し、コセリウはラングの部分を更にまた体系と慣用に二分する。「言」とは具体的な話の行為であり、「慣用」とは言語共同体において恒常的、慣用的かつ伝統的なものであり、「体系」とは本質的で必須の機能的対立を構成する理想的な構造である。

語彙素構造は、この「体系」の中で記述されるのであり、「言語記号が表す記号内容相互間の関係」（1966：130頁）である語の意味が、体系化される。

語彙素構造の内部は更に次のように分けて考えられている（1968：171頁）。

系合構造（対立に基づく）		統合構造（結合に基づく）
一次的	二次的	類縁
語彙の場	変　容	選択
語彙の類	発　展	包含
	合　成	

「語彙の場とは、共通の意味領域を分かち合い、しかも互いに直接対立している複数個の語彙単位が

構成する系合構造」であり「一つの語彙の場に属する語彙単位は、つねに話線上に与えられたある一点で互いに対立し選択対象となる単位でなければならない。」(172頁)。このような語場内の語彙的単位は「語彙素(„Lexem“)と呼ばれており、一つの語場の全内容に相当する単位は「原語彙素(„Archilexem“)」である(1967 : S. 294)。語彙素を構成する弁別特徴は「意味素(„Sem“)」であり(1968 : 173頁)、換入テストによって見つけられる(1964 : 32頁)。これに対し、語彙の「類(„Klasse“)とは、語場の構造とは関係なく、一つの共通な内容の弁別特徴によって関連しあう語彙素の総体」(1967 : S . 294)であり、このような一般的な弁別特徴は類素(„Klassem“)」といわれる。複数個の語彙素が文法的あるいは語彙的に同様の結合をするのであれば、同一の類に属しているといえる。例えば名詞では、「生物」、「事物」、「人間」、「非人間」の類が考えられるし、動詞では「自動詞」、「他動詞」、「動作主着点型」、「動作主起点型」の類が考えられている(1968 : 177頁)。

コセリウのこのような「類素」と「意味素」の区別は、カッツ、フォードア(1963)によってなされた「意味標識(„semantic maker“)」と「識別素(„distinguisher“)」の区別を想起させるが、果してこれらの概念は同質のものであろうか。「意味標識」を語の意味の体系的部分と見做す点で、「類素」に似ているが、カッツ、フォードアがそれを普遍的な意味素性と考えていることに問題がある。確かにそれは一般的ではあるが、世界中の言語を分析してみない限り普遍的意味素性ということはいえないだろう。他方、「識別素」は、語の意味の体系的でない特異な意味と規定されているものの「意味標識」との区別の仕方が余り明確にはされていないのに対し、コセリウの「意味素」は、一番小さい機能的対立と明確にされている。

最後に統合的構造に触れるが、コセリウ(1967)は、ポルツィヒの「本質的な意味関係」を厳密に規定し直し、「語彙的連帯(„lexikalische Solidaritäten“)」と呼んだ。語彙的連帯とは「一つの語が一つの類、一つの原語彙素、或いは一つの語彙素によって内容的に規定されること」であり「当該の語の内容の中に、特定の類、特定の原語彙素、或いは特定の語彙素が、弁別特徴として機能している」(1967 : S. 296)のである。更に語彙的連帯は、「類縁(„Affinität“)」、「選択(„Selektion“)」、「包含(„Implikation“)」に分けられる。類縁の場合は、限定語彙素の類が弁別特徴として被限定語彙素の中で機能している。例えば „fressen“ と „essen“ の弁別特徴は、「動物」、「人間」という類である。選択の場合には、限定語彙素の原語彙素が弁別特徴として被限定語彙素の中で機能している。例えば „fahren“ の弁別特徴は、「船」、「汽車」、「車」、「ボート」、「バス」を包括する単位(原語彙素)である。包含の場合には、限定語彙素全体が被限定語彙素の内容規定として機能している。

3. Fortbewegungsverben の意味記述

コセリウの理論を参考にし、「移動」の語場に属する動詞(Fortbewegungsverben)の意味記述を行

っていく（但し本稿では基礎動詞のみを対象とする）。共域的、共層的、共様的技術の機能言語として、ここではそれぞれ、共通語、中間層の言葉、普通の文体を第一段階のものと設定する。しかし中間層は普通の文体の他に、日常語 (Umgangssprache)、荘重な (gehoben) 言葉、ぞんざいな (salopp) 言葉を状況に応じて使用しているのだから、中間層の言葉で共通語であるものには、文体の違いにより更に三つの機能言語が考えられ、これらのものは一つ一つ第一段階の機能言語に積み重ねられていく。第一段階の機能言語の動詞は、多数の語場に分けられるが、これとは別に〔Zustand〕と〔Tätigkeit〕の意味素性（これはコセリウのいう類素と考えられるだろう）によって大きく分類することができる（図1）。それぞれの語場は、この分類に含まれる場合もあり、交差している場合もある（図2）。

図1

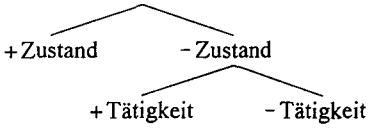
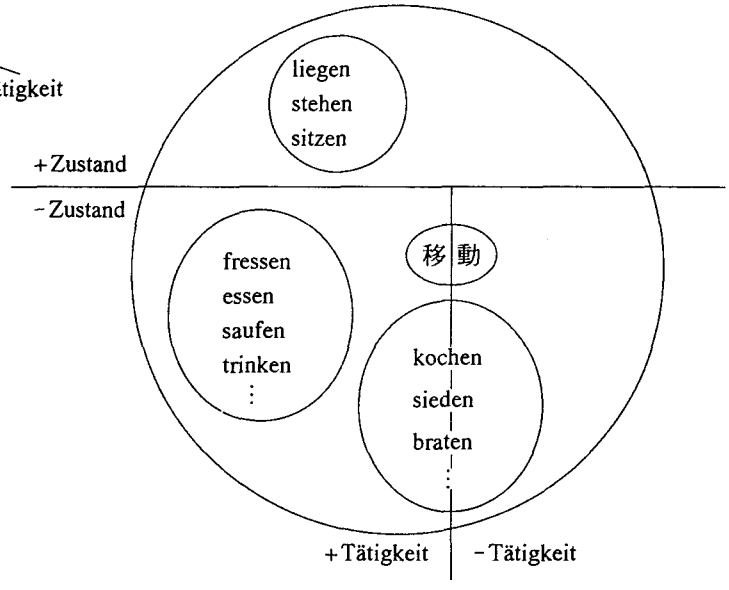


図2



このように動詞全体の中で、「移動」の語場が占める位置は明らかになったが、その内部はどのように構成されているのだろうか。「体系」の中に記述される動詞は、基本的意味が場所の移動を表している動詞、及び基本的意味が移動を表さず他の語場に属すが、多義的に移動を表す動詞である（この場合、単語の前に2.と記す）。場所の移動を表す動詞は、それが何についての、どんな様態の移動なのかを表すために存在している。言葉は、人間中心のものであり、当然、動物の移動よりも人間の移動に関心が寄せられているので、それだけ人間に結びつけられた語彙が多いが、大半はそのまま足のある動物にも使える。人間の移動の仕方で、どの点を意識化しているかによって様々な動詞が使われる。他方、人間の移動の仕方とは大きく異なる動物の移動や、無生物（乗り物、液体）の移動も意識化され語彙化される。これらのことはコセリウのいう語彙的連帯に等しい。しかし特定のものに限定されることなく、移動そのものにだけ焦点が当てられているような動詞もある。

図3

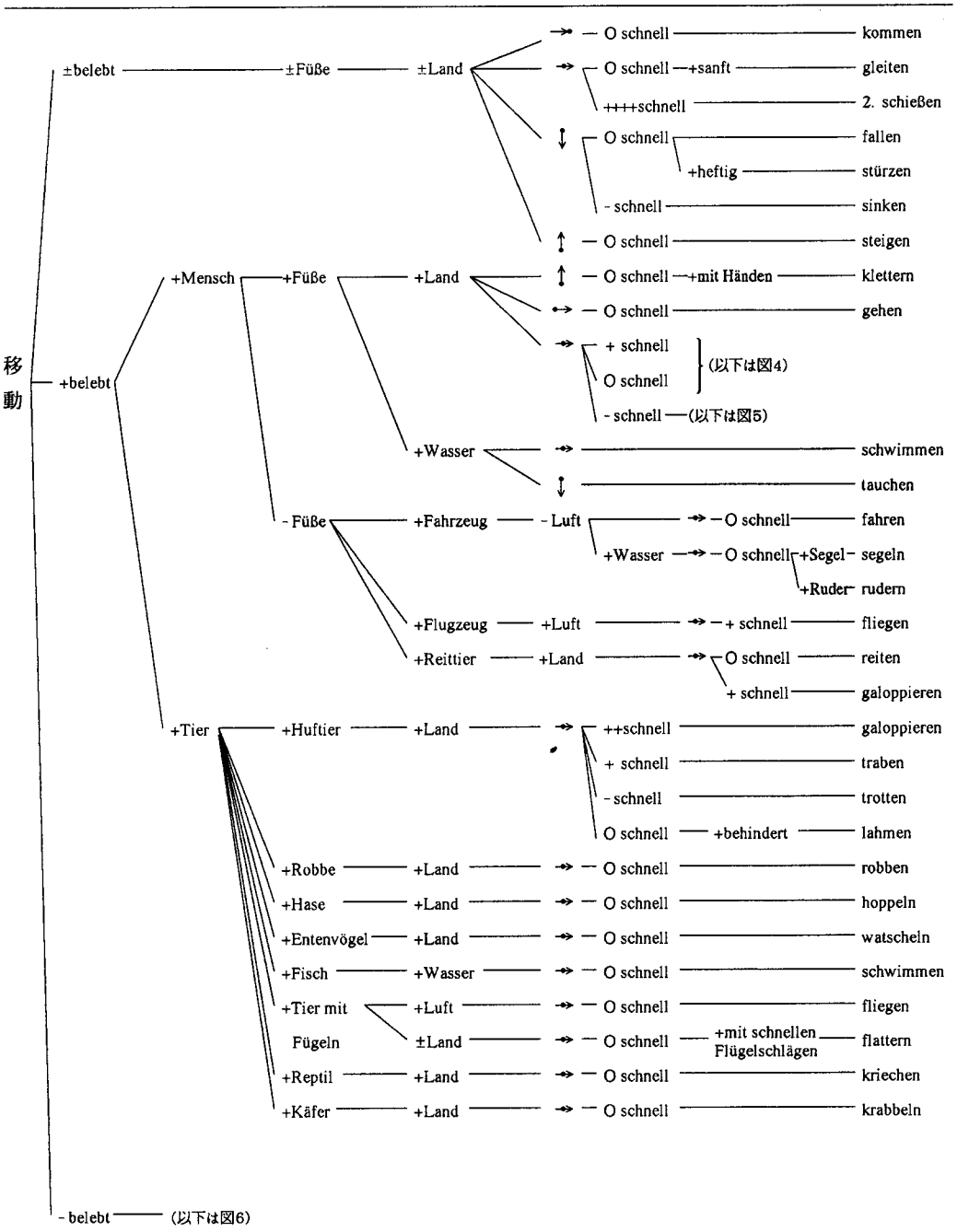

主語
手段
場所
方向視点
速度
様態
移動
±belebt
±Füße
±Land
O schnell
kommen
O schnell
+sanft
gleiten
++++schnell
2. schießen
O schnell
fallen
+heftig
stürzen
- schnell
sinken
O schnell
steigen
+belebt
+Mensch
+Füße
+Land
O schnell
+mit Händen
klettern
O schnell
gehen
+ schnell
O schnell
(以下は図4)
- schnell
(以下は図5)
+Wasser
schwimmen
tauchen
- Füße
+Fahrzeug
- Luft
O schnell
fahren
+Wasser
O schnell
+Segel
segeln
+Ruder
rudern
+Flugzeug
+Luft
+ schnell
fliegen
+Reittier
+Land
O schnell
reiten
+ schnell
galoppieren
+Tier
+Huftier
+Land
++schnell
galoppieren
+ schnell
traben
- schnell
trotten
O schnell
+behindert
lahmen
+Robbe
+Land
O schnell
robben
+Hase
+Land
O schnell
hoppeln
+Entenvögel
+Land
O schnell
watscheln
+Fisch
+Wasser
O schnell
schwimmen
+Tier mit Fügeln
+Luft
O schnell
fliegen
±Land
O schnell
+mit schnellen Flügelschlägen
flattern
+Reptil
+Land
O schnell
kriechen
+Käfer
+Land
O schnell
krabbeln
- belebt
(以下は図6)

図4　　速度　　様態

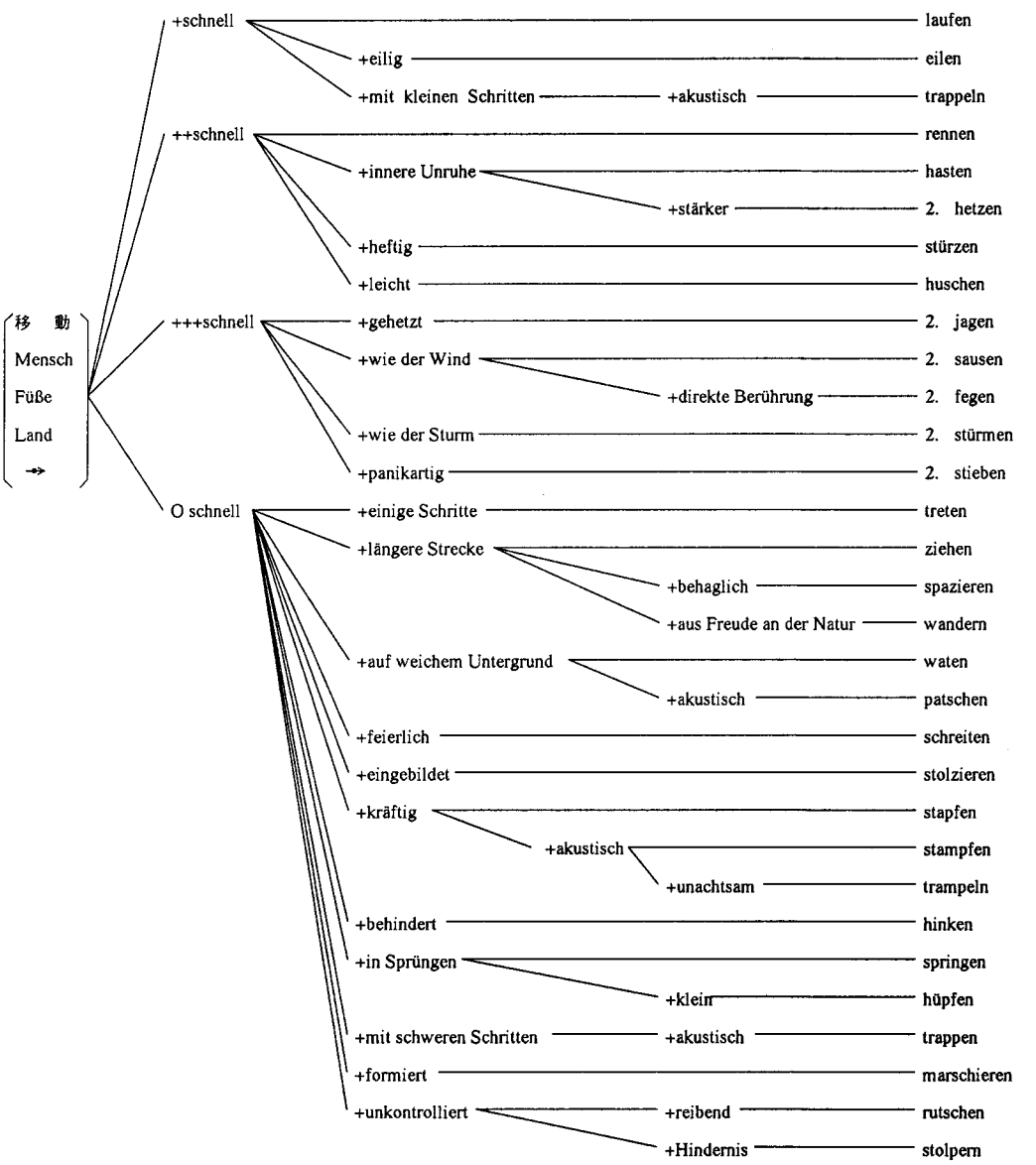

移　動
Mensch
Füße
Land
→
+schnell
laufen
+eilig
eilen
+mit kleinen Schritten
+akustisch
trappeln
++schnell
rennen
+innere Unruhe
hasten
+stärker
2. hetzen
+heftig
stürzen
+leicht
huschen
+++schnell
+gehetzt
2. jagen
+wie der Wind
2. sausen
+direkte Berührung
2. fegen
+wie der Sturm
2. stürmen
+panikartig
2. stieben
O schnell
+einige Schritte
treten
+längere Strecke
ziehen
+behaglich
spazieren
+aus Freude an der Natur
wandern
+auf weichem Untergrund
waten
+akustisch
patschen
+feierlich
schreiten
+eingebildet
stolzieren
+kräftig
stapfen
+akustisch
stampfen
+unachtsam
trampeln
+behindert
hinken
+in Sprüngen
springen
+klein
hüpfen
+mit schweren Schritten
+akustisch
trappen
+formiert
marschieren
+unkontrolliert
+reibend
rutschen
+Hindernis
stolpern

図5

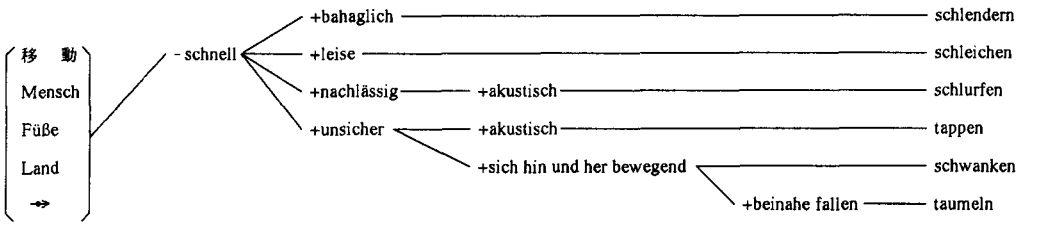
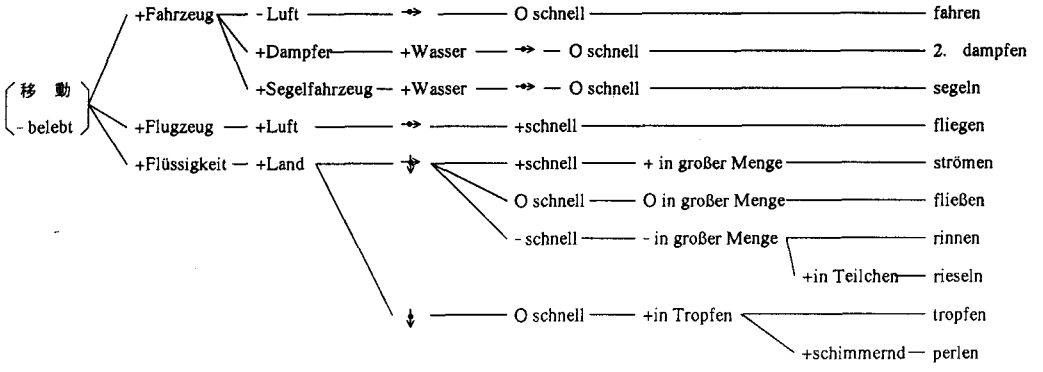


図6



さて分析の資料として、Duden : Das große Wörterbuch der Deutschen Sprache（全6巻）、Brockhaus Wahrig : Deutsches Wörterbuch（全6巻）、Klappenbach / Steinitz : Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache（全6巻）、Schülerduden : Die richtige Wortwahl、Gerling / Orthen : Deutsche Zustands- und Bewegungsverben、及びインフォーマントからの情報を用いた。第一段階の機能言語の「移動」を表わす動詞を、弁別特徴に基づいて記述すると上の図3、図4、図5、図6のようになる（＋はその特徴が当てはまる。＋＋はその程度が増す。－は当てはまらない。±は当てはまる場合と当てはまらない場合がある。0はその特徴に関して中立である。→は移動が水平的である。↑は垂直的で上方向。↓は垂直的で下方向。・は話者の視点を示す。⟷は視点が出発点にある。→・は視点が到着点にある。→・は視点が移動している過程にある）。

更にこの第一段階のレベルには、中間層の言葉、共通語、日常語からなる第二段階の機能言語が付加されることになる。例えば〔+Mensch, - schnell〕に対しては „humpeln“〔+behindert〕、„staksen“〔+steif〕、„stiefeln“〔+mit langen Schritten〕、„stöckeln“〔+auf Stöckelabsätzen〕等の語彙。〔+belebt, +Füße, - schnell〕に対しては „zotteln“〔+achtlos〕、„trödeln“〔+lustlos〕、„trotteln“

〔+mit kleinen unregelmäßigen Schritten〕、„zuckeln“（これは〔+Fahrzeug〕についても当てはまる）〔+träge〕等の語彙。〔+Mensch, - schnell〕には „bummeln〔+behaglich〕。〔+belebt, +Füße〕∨〔+Fahrzeug〕で〔+++schnell〕には „brausen“〔+akustisch〕、„rasen“〔+heftig〕、„preschen“〔+aggresiv〕、„flitzen“[+blitzschnell] 等の語彙。同様に第三レベルでぞんざいな言葉が付加される。例えば〔+Mensch, - schnell〕には „latschen“〔+nachlässig〕等。また第四レベルで荘重な言葉が付加される。例えば〔+Mensch, 0 schnell〕には „wandeln“〔+ruhig〕、„schweifen“〔+ziellos〕、„straucheln“〔+Hindernis〕。〔+Flüssigkeit〕には „fluten“〔+mächtig〕、„triefen“〔+in Tropfen〕等の語彙。最終的にはこれら四つのレベルは積み重ねられる。

最後に「移動」の語場に属する動詞の隠喩的用法について考察する。これらの表現は従来の語場研究では度外視されてきた(Lehrer（1974)、Wotjak（1971）参照)。しかし個々人が「移動」の語場で明示された示差的特徴に基づき、「言」のレベルに於いてどのように隠喩的表現を創り出していくのかという問題は言語の本質的意味に係わっている。移動動詞はすべて、結局場所の移動を表しているわけだが、それらの隠喩的用法の意味は多様である。一般的に言えば、制限が少ない移動動詞は様々に意味の広がりをもつことができるので、隠喩的用法が多くなる („gehen“、„laufen“)。他方、移動の仕方が限定されていくと、隠喩的用法ではその特定の意味が殊更強調されてくるのである。

まず „gehen“ と „laufen“ について考えよう。„gehen“ は生物（特に人間）の足を前提としているので、例えば „Ich gehe mit dem Bus nach Tokio.“ と言うと誤りである。しかし „Ich gehe nach Tokio.“ と言う場合 „zu Fuß“ ということは全く意識されていないし、それどころか実際にはバスに乗って行くかもしれない。„gehen“ 自体は単に「出発点からの前進的方向性」を表しており、話者の視点は、出発点に置かれている（→)。他方 „laufen“ は実際に足を使って早く移動する。両足を交互に次々に速く出していく。このような速くて一様に歯車が回転していく様な足の運び方の場合、話者の視点は、その動いている過程にある（⇝)。

これらの基本的意味が、隠喩的用法とどのように関係しているのかを次の例文によって検討してみよう。

„gehen“	„laufen“
(1) Die Maschine geht.	(2) Die Maschine läuft.
(3) Der Film geht.	(4) Der Film läuft.
(5) Der Rock geht bis an die Knie.	(6)* Der Rock läuft bis an die Knie.
(7) Das Fenster geht nach Süden.	(8)* Das Fenster läuft nach Süden.
(9)* Das Wasser geht in die Wanne.	(10) Das Wasser läuft in die Wanne.
(11) Das Wasser geht bis an den Rand	(12)* Das Wasser läuft bis an den Rand

der Wanne. der Wanne.

(13)* Die Nase geht. (14) Die Nase läuft.

（１） は、機械が機能する。（故障していない）のであり、これから先も更に作動していける。つまり出発点からの前進的方向性（↔）がある。

（２） は、機械のスイッチが入れられて、機械内のモーターが一様に作動している過程（↠）。

（３） は、映画の内容がまあまあいける。この映画の可能性（前進的方向性）を認める（↔）。

（４） は、映画が今、上映されている。画面が次々に一様に変わっていく過程（↠）。

（５） は、スカートの裾はどこまでかというと膝まで（↧）。スカート視点があって膝が到着点。

（６） は、解釈不可能。過程を表していない。

（７） は、窓が南向き（↔）。窓に視点があって、窓の方向が述べられる。

（８） は、解釈不可能。過程を表していない。

（９） は、解釈不可能。水の流れる過程を表していない。

（10） は、水が一様に流れている過程を表している（↡）。

（11） は、水が浴槽の上まで溜まっている。浴槽の底に視点があり、上への前進的方向性（↥）。

（12） は、解釈不可能。水の流れている過程を表していない。

（13） は、解釈不可能。鼻の中の液体の流れを表すことができない。

（14） は、鼻の中の液体が流れている。液体の流れている過程（↡）。

以上の例文からわかるように、これらの „gehen“ 及び „laufen“ は、基本的意味の大前提である「足による人間の移動」ではないが、人間の移動の仕方は、隠喩的にこれらの表現の中に維持されている。

次に „fahren“ について考えてみよう。„fahren“ の基本的意味は「乗り物による移動」である。しかし、次のような文はどのように解釈できるであろうか。

(15) Ich fahre in die Kleider.

(16) Ich fahre mit dem Tuch über den Tisch.

(17) Sie ist mit dem Kauf gut gefahren.

これらの文は „fahren“ の弁別特徴である「乗り物」とは全く関連がない。パウルの辞典によれば „fahren“ は元来、場所の移動を伴うあらゆる動きを表す一般的な表現だった。この動詞の基本的意味は歴史の中で大きく変化したのである。(15)、(16)、(17)の文は通時的に見ると容易に解釈できるが、現在を生きている人々は一般的にはこうした意味の史的変化を学ぶことなく言葉を習得していくので

ある。ポルツィヒ（1934）は、これらの例文は乗り物とは全く関連がないので隠喩的表現とは見做していない。しかし「乗り物で移動する」という基本的意味の中には、「自分の足で歩いたり走ったりすることに比べて楽に移動できる」という潜在的意味が含まれているのではないだろうか。このように考えればこれらの例文は「何の苦労もなく、さっと出来る」と隠喩的に解釈され得る。

身体の一部である指の動きは、足の動きにたとえられやすい。その際、足の動きに特有な動作表現が指の動きに隠喩的に用いられる。

(18) Die Finger laufen über die Tasten.

この場合 „gehen“ を用いると、ピアノを弾くには余りにも中立的なテンポなので希な表現となる。„fahren“、„fliegen“、„eilen“、„rennen“ は速く弾く（但し „rennen“ は「足で」という意味が強いので希である）。„fegen“、„flitzen“、„jagen“ は非常に速く。„hasten“、„rasen“ は余りにも速過ぎると批判を込めている。„huschen“ は速く静かに。„preschen“ は余りにも激しい（但し希）。„stürmen“ は非常に快活に。„schießen“ は極端に速いテンポ。„gleiten“ は滑らかに。„ruschen“ は指が二つの鍵盤にかかったりして不確かに。„kriechen“ は余りにも遅い。„marschieren“ は単調。„tappen“ はぎこちなくて下手。„kommen“ は使用不可。

身体の一部である目の動きにも、指の場合とほぼ同様の動詞が使える。

(19) Die Augen gehen über die Zeile.

但し „rennen“ は指の場合よりも増々希な表現となる。„fegen“ は二つのものが直接接触することが基本的意味であり、目を字に直接付けて読むことは出来ないので使用不可。„preschen“ は攻撃的過ぎるので使用不可。„stürmen“ は嵐の様に移動するのだから目には使用不可。„kommen“ は使用不可。

考えが頭に浮かぶという場合、突然であるのか、徐々にであるのかによって異なる動詞を用いる。

(20) Ein Gedanke geht mir durch den Kopf.

„laufen“ は使えるが „rennen“ はもはや不可能。„fahren“、„fliegen“、„schießen“ „huschen“、„rasen“、„flitzen“、„jagen“、„sausen“ は突然の思いつき。„ziehen“ は普通の速度。„schleichen“ は大抵の場合、不愉快で好ましくない思いつき。„schweifen” はあてどもなく思いを巡らす。

戦慄が走るというのは一瞬のことなので、速度の遅い意味内容をもつ動詞は使えない。

(21) Der Schreck fährt mir in die Glieder.

„schießen“、„jagen“、„rasen“ は使えるが „gehen“、„laufen“、„rennen“、„ziehen“ は使用不可。

言葉が発せられる様は液体の流れにたとえられる。

(22) Worte fließen aus dem Mund.

„strömen“ は堰を切ったように話す。„tropfen“ は、ゆっくりポツリポツリ話す。„perlen“ は言葉に美しい響きがある。„rinnen“、„rieseln“ は希な表現。„fahren“、„fliegen“、„schießen“ は思わず口から出た感情的な言葉。„kommen“ は単に言葉が発せられるということだけで速度に関して中立。„gefen“、„laufen“ は使用不可。

以上見てきたように、各々の動詞が表している特有な移動の仕方は、隠喩的表現の中に保持されている。ここに列挙した移動動詞 (Fortbewegungsverben) の隠喩的用法には、社会的、慣習的に定着したものと、極めて個人的なものがある。後者の場合、ある表現が隠喩として許容されるか、或は解釈不可能な用法と見做されるかは個人によって異なっており、その境界線は曖昧とならざるを得ない。幼児期の言語行為は社会的に規範化されるとはいえ、このようないわばファジィな表現領域には、依然として幼児のあの極めて自由な形象化能力が作用し続けていると考えられる。

参 考 文 献

Bartsch, R. 1984, The Structure of Word Meanings : Polysemy, Metaphor, Metonymy, In : Varieties of Formal Semantics, ed. by F. Landmann u. F. Veltman, Foris Publ. Amsterdam 1984, pp. 25 – 54

Bloomfield, L. 1933, Language. New York 1933.

Coseriu, E. 1952,「言語体系・言語慣用・言」原誠・上田博人訳、『コセリウ言語学選集』所収、三修社、1981、第2巻、1 – 95頁。

————. 1964,「通時構造意味論のために」西村牧夫訳、『コセリウ言語学選集』所収、三修社 1982、第1巻、1 – 80頁。

———. 1966,「語彙の構造的研究への序章」南館英孝訳、『コセリウ言語学選集』所収、三修社、1982、第一巻、81 – 142頁。

———. 1967, Lexikalische Solidaritäten. In : Poetica I, S. 293 – 303.

———. 1968,「語彙素構造」西村牧男訳、『コセリウ言語学選集』所収、三修社、1982、第1巻、163 – 184頁。

———. 1969,「体系、慣用および『言』」下宮忠雄訳、『コセリウ言語学選集』所収、三修社、1983、第4巻、57 – 77頁。

———. 1975, Die Geschichte der Sprachphilosophie von der Antike bis zur Gegenwart, Bd. I, Tübingen.

Frege, G. 1892, Über Sinn und Bedeutung. In : Funktion, Begriff, Bedeutung. Hrsg. v. G. Patzig, Göttingen 1962.

Gerling, M. / Orthen, N. 1979, Deutsche Zustands-und Bewegungsverben (Studien zur deutschen Grammatik 11). Tübingen.

Helbig, G. 1970, Geschichte der neueren Sprachwissenschaft. Leipzig.

Hoberg, R. 1970, Die Lehre vom sprachlichen Feld (Sprache der Gegenwart 11). Düsseldorf.

Katz, J. J. / Fodor, J. A. 1963, The Structure of a Semantic Theory. In : Language 39, pp. 170 – 210.

Lehrer, A. 1974, Semantic Fields and Lexical Structure. North-Holl and Linguistic Series 11. Amsterdam.

Ogden, C. K. /Richards, I. A. 1923,『意味の意味』石橋幸太郎訳、新泉社、1979.

Platon. Kratylos. In : Spätdialoge. übertragen v. R. Rufener. Hrsg. v. O. Gigon, Zürich / Stuttgart 1965.

Porzig, W. 1934, Wesenhafte Bedeutungsbeziehungen. In : Wortfeldforschung. Hrsg. v. L. Schmidt, Darmstadt 1973, S. 78 – 103.

Putnam, H. 1975, Die Bedeutung von "Bedeutung". Hrsg. u . übers. v. W. Spohn, Frankfurt / M 1979.

Trier, J. 1931, Über Wort-und Begriffsfelder. In : Wortfeldforschung. Hrsg. v. L. Schmidt, Darmstadt 1973, S. 1 – 38.

———. 1934a, Deutsche Bedertungsforschung. In : Germanische Philologie. Ergebnisse und Aufgaben, Festschrift für Otto Behaghel. Hrsg. v. A. Goetze/W. Horn / F. Maurer, Heidelberg, S. 173 – 200.

———. 1934b, Das sprachliche Bild. In : Wortfeldforschung. Hrsg. v. L. Schmidt, Darmstadt 1973, S. 129 – 161.

———. 1968, Altes und Neues vom sprachlichen Feld. In : Wortfeldforschung. Hrsg. v. L. Schmidt, Darmstadt 1973, S. 453 – 464.

Wittgenstein, L. 1953, 「哲学探究」藤本隆志訳、『論理哲学論考』所収、法政大学出版局、1976、201 – 330 頁。

Wygotski, L. S. 1934, Denken und Sprechen. Stuttgart. übersetzt v. G. Sewekow. Berlin 1964.

Wotjak, G. 1971, Untersuchungen zur Struktur der Bedeutung. München.

Brockhaus Wahrig "Deutsches Wörterbuch", 6 Bde. Hrsg. u. bearb. vom Wissenschaftl. Rat u. Mitarb. d. Dudenred. unter Leitung von G. Drosdowski, 1976.

Hermann Paul "Deutsches Wörterbuch". Bearb. v. W. Betz, 7., durchges. Aufl., 1976.

Schülerduden "Die richtige Wortwahl". Bearb. v. W. Müller 1977.

Wörterbuch der deutschen Gehenwartssprache, 6 Bde. Hrsg. v. R. Klappenbach u. W. Steinitz, 1977.

Eine Überlegung zur Bedeutung der Wörter

—— Semantische Beschreibung der Fortbewegungsverben ——

Keiko Yamada

Nach Ogden und Richards ist die Bedeutung eines Wortes der Gedanke, der das Wort und das Bezeichnete indirekt verbindet. Um dies aufzuklären, wurde der Sprach-Erlernungsprozeß eines ganz kleinen Kindes beobachtet. Wenn ein Wort dem Kind durch Zeigen eines Gegenstandes beigebracht wird, verbindet das Kind das Wort nicht mit dem Gegenstand, sondern mit der bildlichen Vorstellung, die in ihm der Gegenstand hervorruft. Deshalb gebraucht das Kind das Wort für alle Gegenstände, die es in seiner bildlichen Vorstellung als dieselben betrachtet. Das heißt, das Kind begreift die Gegenstände auf eine individuelle Weise. Aber danach wird diese kindliche Denkweise durch viele Gebrauchssituationen der Wörter in der Sprachgemeinschaft allmählich in den gesellschaftlich-konventionellen Begriff verändert. Die Bedeutung des Wortes ist eben dieser gesellschaftliche Begriff, das heißt die Art, wie man gesellschaftlich den Gegenstand auffaßt, welche Merkmale man daran sieht, in welcher Perspektive man ihn sieht.

Unter dieser Voraussetzung folgt eine Beschreibung der Bedeutung der Fortbewegungsverben. Dazu dient vor allem die Wortfeld-Theorie von Coseriu. Die Bedeutung der Verben wird durch Opposition der Wörter untersucht und durch distinktive Merkmale beschrieben. Den Schluß bildet die Betrachtung metaphorischer Sätze mit Fortbewegungsverben. Dabei ergibt sich, daß bei diesen mataphorischen Sätzen das Wesentliche unter den distinktiven Merkmalen stehenbleibt.

（長崎大学非常勤講師）